

ディスカッションの流儀（その1）

「友好的」に話すスキルを体得しよう！

大和総研 調査本部 副部長 宇野健司



大和総研の提供する授業は、ディスカッション形式で行っています。ポイントは3つ。

- ①「論破」するのではなく、「友好的」に話す。
- ②「まじめ一辺倒」ではなく、「おもしろ、まじめ」に議論する。
- ③「発言の数」が、「発言の質」に転換する。

日本の学生は、人前で話すのが苦手だとも言われますが、実は「ディスカッションの仕方を教わっていないだけ」だと感じます。

社会に出てからも、会議、営業、対人関係などで、円滑なコミュニケーションが取れるよう、学生のうちからディスカッションのスキルを体得しておくことが望ましいでしょう。

①「論破」するのではなく、「友好的」に話す

「ディベート」と「ディスカッション」の違いとは、何でしょうか？前者は「議論に勝つこと」、後者は「建設的な解決策を見出すこと」が、主要な目的であると思われます。

では、社会に出てから、どちらの方が、使う場面が多いのでしょうか？おそらく、「ディスカッション」でしょう。会議、営業、対人関係などでも、「論破」してしまうと、人は協力してくれず、かえって反感が生じてしまうこともあるからです。

そうならないためには、他人の意見をしっかりと「傾聴」し、それを踏まえて、「友好的」な態度で、自分の見解を重ねていく姿勢が必要だと思います。つまり「論理」だけで押すのではなく、「論理+感情」もしくは「論理+共感」が重要なのでしょう。

このようなトレーニングの機会を、日本の学校教育では、あまり提供してこないまま、学生を社会に出してしまっているのではないのでしょうか。

「ディスカッションの流儀」を教えた上で、10回ほどディスカッションを体験させると、多くの学生は見違えるように成長します。その光景は、教える側の醍醐味でもあります。

②「おもしろ、まじめ」に議論する

「まじめ一辺倒」よりも、「おもしろ、まじめ」を意識して、ディスカッションに臨むのが、おすすめです。ちょっとした言い回し、抑揚、声のトーン、間の取り方、ユーモアなどを工夫するだけでいいのです。場数を踏んで練習すると、学生は目に見えて上達します。

「おもしろ、まじめ」を心掛ける人が多くなると、雰囲気がなごみ、全体的にリラックスして、意見が出やすくなる環境にもなります。笑顔で話すと、前向きな発言が増えるものです。「話す内容」だけでなく、「話し方」も、大事なディスカッションのスキルなのでしょう。

③「発言の数」が、「発言の質」に転換する

とりあえず、思ったことを発言してみる。これが、上達のポイントでしょう。初めは、論理的に話せなくても、根拠などなくても、大丈夫です。人前で話すのが苦手な人は、議論が煮詰まる前の早い段階で、簡単なコメントでもいいので、一度発言しておくのがいいでしょう。後になればなるほど、ハードルが上がってしまいますから。

ディスカッションのスキルは、スポーツと同じ。頭で理解するものではなく、体得するものなのです。だから、実際に練習しないと、うまくならない。適切な指導の下で練習さえすれば、個人差はありますが、必ず上達していきます。まずは、「発言の質」にはこだわらず、「発言の数」を意識して臨みましょう。いずれ「発言の数」が、「発言の質」に転換していくでしょう。

学生のうちからコミュニケーション・スキルを身につけよう！

「半分は論理、半分は感情」で、世の中は回っている。社会人としての実感です。いくら「論理」が正しくても、きつい言葉・高飛車な態度ではなく、「感情」にも配慮した発言をしないと、社会に出てからは、受け入れられないでしょう。まさに、“Warm Heart, Cool Head”です。

また、議論を他人任せにしないで「みんなで盛り上げよう、サポートしよう」というマインドを一人一人が持つことが、とても大事だと思います。受け身ではなく、主体的な態度です。

そのような姿勢を持つ若者が、社会全体に増えていくことは、これからの世の中にとっても、望ましいことでしょう。そのためには、大学の教育の一環として、ディスカッション型授業をもっと取り入れ、学生時代からコミュニケーション・スキルの向上を図っていくことが、重要であると考えます。

日本の学生は、人前で話すのが苦手なのではなく、実は「ディスカッションの仕方を教わっていないだけ」だと感じています。 (次回予告:「ディスカッションの流儀 (その2)」)

以上